

命をつなぐ  
小児がん  
治療の  
現場から

「退院してたくさん遊びたい、走りたい」がん治療のために入院した子どもたちみんなの願いです。

6カ月から1年に及ぶ入院治療の間、子どもたちは治療の副作用や合併症、病気の症状によって「動けない」という状況に直面します。数日間寝たきりの状態になったりもします。そんな中でようやく症状が軽減した子どもたちは、いざ病室内のトイレに行こうと歩き出しますが、ひとりでは立ち上がれないことに気づきます。うまくバランスがとれず、つたい歩きでようやく、といった具合です。さらにベッドに戻ると強い息切れ・動悸(どうき)を感じ、横にならずにはいられなくなります。

子どもたちに何が起ったのでしよう？これは「廃用症候群」と呼ばれ、安静や活動性の低下により日常生活に支障をきたすほどの筋力や体力の低下を引き起こした状態です。若く元気な子どもたちであっても知らないうちに進行しています。この廃用症候群の予防・改善と、退院後の早期の社会復帰を目指し行うのが小児がんの子どもへのリハビリテーションであり、闘病中であっても、入院早期から積極的に体を動かすことに努めます。

楽しく続ける工夫凝らす  
頑張る子どもの思いを後押し

時間になれば体を起して歩き、ベッドから離れ活動することを基本とします。起床後にパジャマから普段着に着替え、洗顔し歯を磨く、も含まれます。簡単なように見えますが、子どもたちにとって「起きて動く」はとても大変な活動量となります。

私たちが病室に行くとき、子どもたちが「リハビリしたくない」と訴えてくることがあります。子どもたちの泣き顔に負けそうになりますが、その瞳の奥にある「リハビリをしたほうが良いのは知っているけど・・・」という思いを頼りに、体調や表情をよく観察し、慌てず支援します。当院のリハビリルームにはブランコやトランポリン、乗り物が充実しており、子どもたち主体で楽しいプログラムを組み立てることが可能です。

「リハビリをいかに頑張れるか」これは小児がんの子どもたちが退院後すぐに元の生活に戻るかどうかに関わる重要な要素の一つです。子どもたち自身が自分に打ち勝ってリハビリを継続できるかが鍵となります。

